

い、それは懸懸丁寧に人を馬鹿にする云う事には他ならない。随分と差障りのある事を述べて来たが、しかし私は彼等を決して憎まない。私はそれより彼等がより都会人であると感心もするのである。彼等の何処が都会人なのか、それは一概に定義づけられない。しかし私は彼等の内に洗練された何かを感ずる。恐らく、何れもなく戦乱と大火により「何事も皆喪り果て、稀に残る家は門前草深くして、庭上露後し露が如浅茅が原、鳥のふしどと荒れ果て」と平家物語にも説まれる形だけでも王城の地とし、政治の中心であった京都、古い都としてのプライドと、新興の都市へ対する潜在的な反撥と権威との入り混つた感情の中にそれを感ずるのかも知れない。ちなみに京都の人は東京、関東の人よりむしろ政治に関心を持つ者が多いのは、古い都と政治の中心としての誇りからではないかとも思う。東京をあらゆる人種の集つたアメリカに例えるなら京都はイギリスに例えられよう。融通性の乏しい京都の人間、私には何となくこつぱいにも彼等が見えて来る。憎めないのである。

此の正月の三日、日を東京で過した私は追い羽根の舞うに誘われた様に、急に思い立つて京都へ出掛けた。もつとも大阪に川端と加藤と云ふ二人の馬友が居るのと、思いも掛かず山崎の友人から年賀状を頂戴して、

ながら、私は腕の袂の交番の角を折れて小路へ足を入れた。兩座は初春の陽を背に一杯受けて正面は黒く影になつて居た。二、三間先の小路の奥に、割合背丈のすらつとした後立ちの長い獅子の姿を見付けたのである。私は一介のエトランゼになり切つて、その後姿にカメラを向けるのに躊躇しなかつた。後姿なら先づかくれたるもの美しさで、いたづらなる失望を味わう事もなくさうと思つたからである。

両側から軒をせめて、まるでトンネルの中を行く様な感じの小路がすつと続く。両側はお茶屋が多く間口が狭く細い笠子のほまつた碧右の窓が続く。やつと一人一人通れる鴉の行脚の奥にも竹をあしらつた門口が昼間でもうす暗く、すかして見られる。「名は盛く人は和らく石垣町、前には恋の底深き淵に愛身先斗町」とは近松の「長町女辰切」の一行を思い出すのである。此の辺りを木屋町として先斗町と書いて居るのだからうと思ひながら私は感心もなく後女の後につついて歩いて、道すがら両側のお茶屋の女将をに挨拶を交わしながら行く後女の仕舞を眼に止めた。何かの時に顔向いた後女の顔が思つたより老けてゐるに私は驚き、また想像したより美人なのに満足もしない。足にまかせて私は歩きまわつた。四条通りと河原町通りとの交差点を中心に十字に歩いた。隣井大丸の並びの「再会」と云ふ喫茶店や縁屋の裏

それをきつかけにして旅立つた。列車は思つた通り非常な混み裡で、例によつて並ぶのが嫌な私は一人旅の気程さから、このこと適当な列車に乗り込もうと思つて出掛けた。運よく「彗星」の座席券を見知らぬ女の人から、不用になつたからと譲り受けて、さもないれば最終の「どん行」でと覚悟して居た所でもある。ともかく翌朝の九時には京都へ運ばれて来た。先づ其夜の宿を手配してしまふと、もう私は此處で何をしようかと、何処へ行こうとも誰に気兼ねするでもない。全く解放された気持ちを味わうと同時に、ある味気なさも感じたのである。幾度となく訪れた京都には、殊更に出掛けようと思ふ寺も見たい所もなくなつてしまつた。京都と寺院とは修学旅行のせいではないが、京都と云えば寺やその庭園を連想し、二つを切り離して考えられなくなつて居るので、私も御多分に洩れず、いつでも京都駅に下りて、構内を出て駅前広場の向うに開ける京の街と、青景の山波を眺める時に、今度はどの寺へ行つてみようかと先づ思ふからである。しかし、今度はさすがに取返して出掛けようかと思ふ寺院も場所も無くなつたと云う感じである。未だ行つてない場所も多くあるが、いづれも似たり寄つたりで、殊更の興味も湧かない。街中の雑踏にもまれて、ぶらぶら気まま歩きをして居つた方がむしろ気分が良いとさえ思う。

正月興行の暇の立つた兩座を四条の橋の向うに眺め

京都には、京都へ来る度びに立寄る。どちらも落着いた祭囃気が好きで、何時間でも私は其処に坐つてぼんやりして居られる。居たいだけ居られる。殊更に百くさく、しつくりとした感じの「再会」の何となくカビ臭い緑なシートに腰を下ろして、細い棒のある椅子越しに前庭の少年の石像を眺める。厚手の瀬戸のカップはコーヒーも冷めにくく有難い。両の手平で包むが如く支えてカップの厚い肌を通して、皮ふに伝わつて来る中味の温かさが此上なく嬉しいものつた方が良いかも知れない。コーヒー談義をする途もないが、結局のところ、酒もその銘柄により好みも異なる。コーヒーもまたその産地、あるいはそのミックスの種類と配合、更に当人の普段の嗜好にもよる。酸味を好むもの、苦味を好むもの、もつと淡泊な味を好むもの種々様々、要は各自自分の口に合つた所を喫すれば良いと云うわけである。

私は家に居ては決して煙草を吸わない。他所でもめつたに吸わない。しかし私は、決して美味とは思わないが、此んな時に煙草を吸ふものだと思ふ。要するに手持無沙汰になるからである。指の間にはさんで、自然に立ちのぼり天井にぶつかり四方(天井を這う様にして)抓取する雲煙の行方を眼で追うのである。何を考え何を思い、何を期待するのか、私はそんな時これ

と云つて特別な事は考へて居ない、晩に何を喰おうか、誰を今頃どうして居るのやら等々、愚にもつかぬ事をあれこれ考へる。そんなにして私は最初の一日を過ごした。

日暮れ前に宿に帰るべく私は早い時間に街中の、賑やかさ華やかさに見切りをつけて、四條大宮から嵐電で嵐山へ向つた。

ひそやかにしのびよる冬の早い夕闇を直ぐ身近に感じたが、例によつて大塚川に沿つた小径を大塚間への道程をたどつた。困つた事に四ツ足の車は通れない径なので、同じ四ツ足でも馬の方が便が良い。その宿舎は徒歩か、川舟でのぼるより仕方ないのである。

それ故いつも宿は静かで愛な客はあまり来ない様である。此の時は舟はあつても冬枯れた感じの舟泊りに船頭の影も見えなかつた。もつとも船頭が居ても舟に乗る気はなかつた。凡そ一丁余りの足許のおぼつかない道を肌を汗をにじませてのぼつた。

宿についた私は去年夏来た時に泊つた部屋の隣におさまつた。それは宿の入口から一番とつぎの一棟であまり上等客を入れる部屋ではない。私が一番最初に来た時に通された部屋の方が立派で、ずつと奥の上の方の棟だつたと覚えて居る。

流れに面した縁先の硝子戸越しに、猫の顔程の産があり、その植木の位置に記憶があつた。まさか

渡る辺りを保津川と云い、嵐山にかかる辺りを大塚川、更に下ると桂川と云われる。末は大淀川に注ぐ。

保津川下りは涼石の「眞美人草」にも見られる。ただ私は避險して居ない。一度試みようと思つて居るが、一人ではつまらぬ。恋人でも出来た時に、紅葉の頃がよからうと思ふ。

山崎の友人から食事の途中で電話があつた。丁度半年振りで彼女の声を耳にする。朝のうち一度あつたそうだが、私は未だ宿へ着いて居なかつた。電話の向うの彼女を想像しながら、私は懐しく彼女の声を聞いた。

物来らかくひたひたと頬にまつわりつく様な声音であるが、それは決して聞きたくないものではなかつた。翌日の午後を彼女と行を共にすると約して電話を切つた。彼女は仕切りと私がもう既に結婚して居て、うっかり買状を出してしまつて、いけなかつたのじやないかと等と氣にして居た。女つてそんなつまらぬ事を直ぐ氣にしたがるものらしい。その実大して意にも介して居ないのだから。もつとも友人の言が結婚したとたんに、それ迄来て居た女性からの年賀状が、ばつたり来なくなつたと願つて居た。翌朝遅く起きて朝風呂を薬

しんだ。朝食は何処の宿屋でも同じ様なもの、決して食欲は起きない。約東の時間より早目に宿を出た。渡月橋を渡り橋の袂を左に、流れに沿つて折れて歩いて。亀山のふもとと天龍寺へ寄つてみようと思つた。

「エルマンチニ」ではあるまいが植木の位置が変わつて居ると思われない。部屋の様子も去年の夏に泊つた隣の部屋と同じ様に思われる。(ホアロー・ナルスデヤック共著の推理小説「影の顔」、主人公はわかず、ふと以前に歩き慣れた別荘の庭園の一角で、其他に自分の手で植えた株の木を手探りで探したが、唯空しく失望のみをつかんだ。しかし別の日に再び其処で今一度手探りを試みた時に、今度は確かに手応えがあつた。しかも柔かく生毛の生えた実手に触れた。彼は前にも増して不審と恐れと不安とをつかみ取つた。(註作者二人は映画「めまい」「悪魔のような女」の原作者)

一河の流れは絶えず音を伝へて来る。ある一定の間、それは雷の音の現われである。日本国有鉄道の、救い難い程の凡庸さの現われである時刻の組合わせによつて往來する——を置いて山陰本線の嵯峨駅と亀岡駅との合間に響いて来る。丁度此の部屋の右斜前方の亀山のふもとを貫いたトンネルを出入りする列車は、木間がくれにと云い度いが、今は枯木の根立つ山肌であれば、一条の明るい光の帯の様に走り去り行く窓の明りが、妙にこつぱいに眼に映る。貨車も運る。縁の硝子戸がびりびり鳴る。黒い煙もつかしい。

大塚川も丁度此の山陰本線が寄物岩の辺りで鉄橋を

天龍寺は津路浄宗の大本山で京都五山の第一位を占め、後醍醐天皇の離宮になつた事は周知の如くである。寺内に入り、良く手入れされた庭を眼にする及び、また何処の寺や庭園に於ても人を受け付けない——取りすました冷さを感じ、自然に加えた人手の造園術の巧みさはさる事ながら羨しいと思つれば感ずる程、私は突進された様な親しみの無さを覚えて、唯驚愕する。と云うより妙にわびしさと無立たしさを感ずるのである。

一定の造園法による池の形、岩石の配置、中島の位置と形、一つとして乱れを見せないたづまいに何とも云えぬ厳しさを感ずる、禪の影響と加えて茶の湯の普及により、より内容的になつた庭園は、どうにも私にはやりきれない焦燥を感じさせられた。

嵐山に出て私は例によつて中村楼二軒茶屋、探けた障子戸を開けた。いつか来た時は客がなかつたが、其時は話の様子で、東京の教育大辺りの教授と会社重役とても見受けられる紳士二人の先客があつた。見覚えのある氣の良い小粋な女将に私は甘酒を求めた。白い羽織の下に襷織の羽織を着、かがみ込んで釜前に背を向けて居る姿に、私は数年の過ぎ去つた年月を見止めた。最初に来た時は始めての関西遠征の時であつた。ゆくりなくも私は二度の遠征と兵庫での困

出町柳の飯山橋に乗り、河合橋を渡りながら享した、あの時のメンバーの写真を出した。市原主将の演出よろしくさも彼が指差して、其の辺りの説明を聞いて居る様な私等のそのつた表情、羞さを感じ私は何とも云えぬ懐かしさを覚える。

一度は円山公園から平安神宮へ通ずる道に放駒の馬を駆る人を見掛け、他に乘せて呉れば一寸沙汰の一つも被罵るものかと思つた事や、また一度は眞山から大寛寺へとふらふら歩き道のすがら、恐らく大衆の撮映所のトラブの場であろう。敬祐の後に追つて歩いた事等を思出した。大寛寺は映画「金閣寺」のロケ地になり、直ぐ隣接する大沢の池の畔りに金閣のセットが組まれた。大沢の池と近くの広沢の池は、芭蕉の句で「名月や池をめぐりてよもすがら」と歌われて居る生草入りの甘い、と云う處ではなくさつぱりとした甘酒を口に含みながらほんやりと私は当時の事を考へる。「春は花、いざ見にこんせ眞山、色音あらどうは様や輝かれ輝かれて輝も不祥も物騒い、二本さしても柔から、祇園豆腐の二軒茶屋、みそぎを夏はうち通て、河原にどうどう夕すま」(京の四季と云う古い唄)

時間のあるがままに高瀬川辺りの柳の通りををせろ歩き、折から原伝の通過に接した。丁度やつて来た京都の選手をカメラにおさめた。凡そ随外が「高瀬舟」を書いた頃には此処を原伝の選手が走る等と想像も思つた。しかしそうした彼女を見ると現在の年令よりずつと老けて蒼蒼した感じを受ける。肩を並べて雑踏の中に立混つて行くと、まるで東京に居てやうする様な気安さを互えて、自分が人の流れの中に完全に溶け込んで行くのが分かるのである。もうエトランゼでは無いと思ふ。

何處か適当な所へ連れて行つて呉れないかと云つても、困つた事に彼女より東京者の私の方があちこちを知つて居る様だ。異性の間には眞の友情は有り得ないとエスカワイや下も差入って居る。臨かにその通りだと私も同感の意を表明し無い。しかし私の心の中に彼女に対して、どんな感情が動いて居るのかと問われても私には明確な答は出せない。或いは彼女が将来のベター・ヘーフになる女かも知れない。結局の所旅行にまかせるといふなら、誰が好きなのと云つてみた所で、どうにもならぬ事がある。三、四度くなが運命と云うものなのだから。時に当たつて自分の踏み出す足を左か右にせんかと迷う事がある。その時自分で決めた道が後で考え直してみても、反対の足を踏み出した方がよかつたのではないかと思ふ事がある。しかし私は其の時に決して後悔しない。其の時はそれが一番正しいと自分で考へてやつた事なのである。

結局の所一案のレールの上を走る草の如く、死に同

しなかつた事だらう。「高瀬舟」は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されること、本人の罪状が牢屋敷へ呼び出されてそこで毆打することを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ送られることであつた。

「高瀬舟」の書き出しである事は今更にも云う迄もない。あれは夏の始め頃と思ふ。もともとの一文からそれと分かるが「空一面をおもつた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、ようよう近寄つて来る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の上からも、霞となつて立ち昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、加茂川を貫切つた頃からは……云々」とある。二条大橋の西の袂から加茂川へ折れて木屋町の通りにかかる。その右側から加茂川の水を引いた浅い川が加茂川とほぼ平行に流れて居る。それが高瀬川である。さて私は高瀬川の斜側にある「トロンカ」で彼女と待合させて居た。

薄いニンジ色のシャツの半コートを着た彼女は先に来て待つて居た。此処には京都へ出て来る旅びに寄るので何だか気がひけるのよと云う彼女の言葉で、席に落着く間もやらず私は先に立つて外へ出た。暖い、突に暖い。ニンジ色のコートの下には黒っぽい細い柄の一面にある着物を着ていたが、布地はウールか何かだつて進んで行くに過ぎないと思ふ。どの道を進んでもそれが自分の歩むべき道として用意され、回かれて居る道だと思ふ様になつて来た。ああして置けばよかつた、こうして置けばよかつた、私も凡人並みに思ふが今更にそれを考へても詮ない事である。思えば九千方だかの人間の中から思いも掛けず道で出合つたりする者は、その一人一人が何等かの意味を持つて自分の前に現われるのだと思ふ様にもなり、その一人一人にも自分の心を広げておかなばならないと思ふのである。ウイムヘル・マイスターの修行時代の如く、自分がその前々に出会う人が、自分の将来に何等かの役割を演じて居るのだと云う事を深く考へさせられるのである。

彼女と連れ立って、夕暮れ近い詩仙堂を訪ねた。傾きかけた赤味を帯びた陽光にすつかり髪は落ちたが、夕陽の赤味を一杯に吸い込んで染まつた様な異様な色の髪を脱つたつた水の太が、冬枯れの物まじびた庭に一きわきわ立って見えた。黄色く枯れたつた芝の上で掃き残されて、からまつた木葉が足許で鳴る。戸を全部はらつた壁先に並んで腰を掛け、行儀悪く足を投出してつくねんとして、須おどしの顔のはねかえるかわいた音に耳を頼向ける。「私はこんな所へ、好んでやつて来ては、何時間でもじつとして居る男の人つて好きよ」と、と云う彼女の

言葉に私は、「余裕のある心で云うのかい」と云つてやつた。半ば彼女をからかうつもりで。しかし内心は私もくすぐつた。私の心の中にそんな余裕を求める心があるかも知れないし、無いかも知れない。しかし暢気な事は暢気である。

「威風凛の儀門脇に横んである襦袢は、中身が入つてゐるかね、もし入つて居たら夜番は大変な事だらうね」と私は一寸考え込んだ彼女の気持をはぐらかすつもりで唐突に云つてやつた。四糸の御足袋所に飾られた生一本の一升ビンの列をその時思い出した。もう三十円出せば、御うすとお茶菓子が食べられたねと帰る際に、参観料と行を並べて書かれた壁の字を認めて二人して笑つた。

彼女は着物で歩くのが儼然だったが、さりとて負つて行くには私も不気恥しい程に若い。卒業試験を終えたらガサな仲間と上京すると云つて居た。

桂の駅で彼女を見送り、風袂の宿へ歩き慣れた暗い夜道をたどつた。宿の者が灯りを貸せばよかつたと補つた私に云つた。猿が出てよく悪さをするそうで、女子供等は昼間でも八歩きはしないさうである。岩田山には放飼いの猿がいる。

去年の夏は丁度鶴岡の夷演を此地でやつて居て、何杯かの河舟にかより火を焚いて賑かだつたのを思い出した。見物の屋形も出て三弦の音も聞かれたものだが、

冬の嵐山は静かに淋しい。湯に浸つても河の音が絶えず耳を離れぬ。大退閑も去夏は修理の足場をかけてあつたが、此度は返るのが儼然と見に行かなかつたからどうなつたか知らない。

冬の朝の苔寺の庭もまた良いのだがと思つて床にいたが、朝食に例の如く湯葉の吸物が出たのを見て行く気がなくなつた。

大阪へ出て、加藤と川端に会わねばならない。二人共に「落馬会」のメンバーでもある。

朝早い京橋嵐山線の車輜は朝陽を心ゆくまで浴びてとても東京の混んだ電車を思い出せない。きれいと云えないが車窓から一杯に入る朝陽を浴びながら、長い座席にごろりと横になつて運ばれて行き度い縁のえんびりとした気分を満喫した。桂で大阪行きに乗り換える迄二つの駅を通過する。

今度は一つ、秋の紅葉時の嵐山と清滝へゆつくりと滞在するつもりで来てみたい。蘆花が蕎麦を食う金さえなくして、尻をすえて居た清滝に私も居たいだけ居られたらと思ふのである。

旅に暮し旅に死んだ其の昔の風流人がうらやましくもなつて来るが、さりとて未だ未だ世の中に野心があり過ぎる。

三十五年二月

初乗会観戦記

英二 萬 井 由紀子

確かに馬鹿である。別にうかうかうかでもほめられるわけでもないのに、夢中になつてしまふ。そこに馬の魅力があるのだらうと思ふけれども、いつも気が張つた他校との試合ばかりでなく、何か楽しい行事が欲しいと思つていた所なので、この会を聞いた時に、小さい子達が運動会を楽しみにしている様な気持ちになつた。私達下級生部員にしてみれば、初めて先輩のお手並を見せる機会でもあり、先輩の方々に對しては「オレにもあんな時があつたのか」と思ひ出す時でもありましよう。何しろ上級生からマセン棒をまつて遅いかけられたとか何と上聞かされて、かつてな想像をめぐらしていたが、三々五々紳士淑女がお集りになり各大学から借りた馬も到着して、にぎやかになつた。自称馬場での開会式、張つたテントも北風にあおられ、乾燥した一月二四日の出来事であつた。血圧の高さをそるそる気にし出す年頃の紳士の方も元氣よく、久しぶりに長靴をはいて足がしびれたといつて悲鳴を

あげる先輩も、かつての名主将ぶりを發揮する人、マイクを通しての名司会につれて人間と馬の演技(?)が披露された。もし落馬でもすればそれこそ落馬賞でも出かねない様な雰囲気である。遠い所からいらして下さつた諸先輩の間には音段のしわのばしをして音聲(?)多き馬術師時代をなつかしもうとする意気が感じられてはえまじ限りであつた。

成績は善乗の競走は熱戦の結果、一位が佐藤、相馬阿先輩に現役の岡さんチーム、二位は現役の堤、金子一言さんチーム、琴平は音楽にのせて今流行のミス何々ばりの激しい予選を行い、その結果ラッキーな高倉さんが一位となり、多に皆を下キドキさせた。ますます強く吹つける北風のうすまき馬場で、中障曹個人殿、各々の秘めたる野望を抱いてさつそうと登場、花房にのつた沈先輩、見事な騎乗ぶり、現役をノックアウトして、万点の成績で堂々第一位、0Bの賞銀を示した。二位は東儀にのつた小池さん、難馬を上手に騎し、三位は花房にのつた茶谷先輩、さかんな声援の中で万点で通過し、四位は女性としての面目を立ててくれた島原さん、五位、相馬先輩と決定した。馬の手綱さばきもあざやか、多分社会に出ても、すべての事にそのまゝを示している事と思ひます。

最後に0B対現役の試合、種々の下馬評をたてて両方とも策を練つて、負けじ魂をみせる。スリー・チャ

「緑鞍会对全証券」観戦記

第三 高 倉 彰

「これは昨日の方々不届品行方正なんだ」と思ったのだが、試合開始一時間位前から猛烈な風が吹き始め、応援の現役部員一同、馬場に水をまくという予期せぬ事が起った。彼等なんだが風が強く、志はチリヤホリで赤く赤まり、陣羽はハタタと倒れたりして、この風のように、試合も荒れるのではないかと思われた。定刻に迎れる第一時間余りで試合が始まった。全証券一番土佐佐々(白葉菊)は、美事な馬を振り、減点〇、二番徳徳会の庄司(同スターンビード)も負けずと減点でローキ、ワイドを内に秘めて、一番ささだ(好勝家)であった。三番全証券加藤(同美水号)も今更上り気味で区々たるが第二陣羽は二番身をまわして減点一〇、四番緑鞍会(同エヒヤ

ント号)は、ホタテをひらひらさせながら文字通りニレガントに全障礙を無過失で飛越、馬場内では東さんが名(送)カメラマンを差して、メチルムチリ。五番全証券(同センキヤ号)は、顔面蒼白、神経質そうな騎乗で、第七、十障礙を拒否され減点六、上はどくやしかつたと見えモンキヤ号を、ビンヤリ、随分力のこもった飛越であった。六番緑鞍会佐藤さんは、新馬神ノ花号に騎乗、連日の練習の中であつて好騎乗し減点九、七番全証券(同スターンビード)は第三障礙飛越直後トラつき、その為勝手に理解があつて拒否され減点四、さすがの名馬も障礙の袖は飛ばなかつた。八番緑鞍会市原さん(白葉菊)次々と味事に飛越、これは満点かと思わせたが、第八障礙でカメラを意圖したか油断したか拒否されて減点四は残念。然し往時をしるに十分な好騎乗振りであつた。九番全証券相川さん(ニレガント)が減点〇でゴールすれば、これに対応するように一〇番緑鞍会黒根さん(美水号)は、本試合出場者中出色の騎乗を示し、満点でゴール、試合にそなえてどこかで練習してきたのではないかと思わせる程で、現役一同首をかきしげながら少し興奮のしきり十一番全証券高橋さん(神ノ花号)何か元氣なく第一障礙から拒否される有様、以後相關的も減点一九、二五、この辺ですべてに勝負あつ

たの感、意気揚々たる緑鞍会御であった。十二番緑鞍会村野さん、その身体にふさわしく、チヨコチヨコした(失礼)モンキヤ号に騎乗第九障礙飛越再び第四障礙に向い一障ヒヤツとさせたが、よく立て直し減点〇でゴール。駄目押しとも思われる六点の差をつける。ここまでの成績は、全証券減点四、二緑鞍会減点二二七五でその差二七、五。劣勢挽回を計る全証券は、十三番山本さん(白葉菊)が好騎乗を示すも、第六障礙で随件を誤り、減点三、十四番緑鞍会中島さんが太すぎではける長靴がなく、短靴で騎乗、肥體を背に苦しそうなスターンビード号はそれでも金障礙を難なく飛越して満点でゴール、第二障礙飛越後鋭がぬけ、東さんと代つてカメラを持った黒根さんから「體なんかいいから行け行け」「馬鹿野郎！殺生な事云うな。落馬したくないからな」云々とやりとりをする等余裕たつぶり。誰かが云つていましたよ「収が落ちたら地球がこわれちゃう」もつともあどつしりと乗つてたんでは落馬する筈がない。この様なニモラな場面を繰り返す中、さすがに強風下に試合は進み十五番全証券栗原さん、さすがに往時の名選手だけあつて、美水号をよく手の中にいれ落ちついて全障礙を完乗して減点なし。藤根さんと並び本日の最前騎乗ぶりであつた。十六番東さん(ニレガント)は奥さんがみている事として大いに張りきり、満点でゴール。十七番全証券加藤さん

〔評〕

待ちに待った第二日第四試合対立大戦は準々決勝である。あいにく朝から霧が降り、風が吹きすぎり雨また強く第一試合以後本学の試合まで一時間以上も経過せねばならぬ。この際、しかし「手」のコンディションは試合開始直前に於て最高であつた。絶対に負けられない試合であつた。霧も正月も返上して馬に乗ってきたのではないか。負ける筈があるものか。口には出さねど皆心に思つたであらうと……しかし実際は負けたのである。選手全てが満足感を持つて乗り終つたのにも拘らず。なにも云うことはない。たゞ試合に敗れたのだ。高倉が四回ぶつて飛ばし得なかつたレンカ降得を立大芥川は四回目に都合八回目に始めて飛ばしたのである。



〔評〕

第五回学習院女子定期戦
三月九日(水) 晴 馬場 良

新人戦

本 学 学 習 院					
選手名	減 点	馬 名	減 点	選手名	減 点
菊 地	8.75	姫 桜	14.75	津 軽	
藤 田	8	青 影	0	浅 岡	
五十嵐	14.35	青 波	18.15	深 水	
山 本	4	山 桜	10	小 栗	

本学—2430 学習院—3390
差96点にて青学の勝

レギュラー戦

本 学 学 習 院					
選手名	減 点	馬 名	減 点	選手名	減 点
日 高	0	峰 好	0	山 田	
木 田	0	東 秋	0	前 川	
石 割	21.15	青 葉	20.15	奥 野	
高 橋	19.15	明 桜	19.15	西 川	
井 田	9.15	青 波	13.55	今 井	

本学—5025 学習院—5285
差26点にて青学の勝

〔評〕

朝から、霧雨が降つて、ひどく寒い日で、渋谷界隈は、ぼんやり煙つていた。九時に、東映前バス停留所に集合したが、私が、着いた時には、既に、ほとんどの人が集まつていた。私は、学習院馬場へ行つたのは、初めてであつたが、周囲に木が多くて、それほど広いというわけではないが、部室、宿直室、更衣室等が、一軒の家になつており、とても羨しい気がした。

強化練習中、青葉は、余り調子が良くなかつたので、とても心配。そんな私達の心配を他所に相変らずの、青葉の無表情な顔が、見える。青波の澄ました心得顔と、影のなまけない様な、可愛い顔。こども、影は、女子部員に一番人気がある。遠藤前キヤプテンから、新规定その他の注意があつて後、全員でのスリーチャンス。これは、あとからTさんに聞いた話。側に居た、学習院大の某君、「羨しいですね、スリーチャンス、オーキヤツ」。

新人戦の前段は、菊地さんで、学習院の、姫桜に騎乗、60点食つた。藤田さんは、青影で柔軟性のある乗り方をして、減点8。青波は、少し興奮し気味だったが、五十嵐さんが騎乗して、38点食う。最後に山本さんが山桜に車拍で騎乗、よく馬が出て、第一、第二は、軽く通過したが安心したためか、第三で左に切られ、「しまつた」という顔。後は順調にゴール。レギュラー戦では、日高さん(峰好)木田さん(東秋)は、無事満点でゴール。青葉は、準備運動の時からこね始めて、阿波選手ともタイムになつた。続いて高橋さんは明桜に騎乗して、優美な馬上姿で、スタート、最後に青波で出場した井田さんは結局この試合を通じて、青波に騎乗した人の中では一番良い成績だった。試合終了後、ごくながやかな、親睦会があり、自己紹介、各部の事、雑談等して散会した。(水島)

第六回関東女子学生馬術リーグ戦

ひどい嵐の日、曇うつな雨の日が続いた後、からりと気持ちよく晴れ渡った青空の下で、女子にとつて最も大きな試合の一つである、関東女子学生馬術リーグ戦が行われた。

十日間以上にもなった、強化練習で少し疲れ気味の人も居たが、一年生にとつては、始めての試合でもあるし、四年生にとつては最後を飾る試合とあつては皆の緊張した顔もなかなかである。参加校は、学習院大、慶応大、成城大、早大、青学大の五校、

新人の部・障碍・部
馬場は重、障碍では馬鞍が脱出まことにスマッシュイ状態を呈していたが島原さんカツハヤをよく乗りこなして二位に入賞、部理では、水島さんがカンの高い難かしいアケヒメで優勝、原田さんも三位に入賞と、このあたり強化練習のためものとは

新人障碍	一位 田中(早大)
	二位 土井 島原(本校)
新人部理	一位 水島(青学)
	二位 津軽(学習院)
	三位 原田(青学)

新人の部・障碍・部
馬場は重、障碍では馬鞍が脱出まことにスマッシュイ状態を呈していたが島原さんカツハヤをよく乗りこなして二位に入賞、部理では、水島さんがカンの高い難かしいアケヒメで優勝、原田さんも三位に入賞と、このあたり強化練習のためものとは

木田	0	峰好	3075	富山
井田	0	慶隆	025	村上
石割	199	慶光	219	平山
高橋	239	姫桜	245	原田

第二試合は対成城馬は、峰好、慶隆、姫桜、それに又慶光である。木田さんが、落ちついた騎乗ぶりです。満足、幸先のないスタートを切った。二番成城の村上さん慶隆で減点0、試合はスムーズに運ぶかと思われたが次の慶光が大変で、ウエテラン石割さん、二度目の騎乗にもかかわらず、御し切れなかったのは、惜しかった。高橋さんは短気で圧倒されるようなフアイトをお見せになり、声援の飛ぶ中でこの試合も青学の勝利に終わった。

石割	170	ウメゼン	152	中塚
高橋	8	カツハヤ	102	尾崎
井田	238	姫桜	204	今井
木田	164	稲将	160	菅

以上の成績で、青学が優勝したがこのリーグ戦を観て感じたことは、新聞にかかれた様に「男子顔負けのスパルタ式練習」と思えないけれども、練習のおかげか青山の女子は強いばかりでなく密着着きもフアイトもあり、練習中は、さ程感じなかったが、他校の選手達と較べてみて断然ひかっているということがあつた。これからもしっかり練習して又来年も優勝杯を手に、記念写真を撮りたいものである。

(高尾)

青学		学習院	
氏名	減点	氏名	減点
日高	4	慶隆	0
木田	0	春風	0
石割	200	慶光	220
井田	154	披華	174

レギネラー敬
先ず学習院とである。馬は慶隆、春風、慶光披華。問屋の慶光に騎乗した石割さん、よく推進して第一障碍を飛ばせたが残念にも二拒失敗、だが、前段にもつたのはさすがである。故意か偶然か成華には阿校のキャプテンが騎乗、互いにフアイトのあるどこか似たような騎乗ぶりを示していたのは、興味深かった。

いえ、青山の面目躍如たるものがあつた。

対名古屋大学戦
三月二十四日(木)
於青山学院馬場 良

青学		名古屋大	
選手名	減点	選手名	減点
細内	1075	青波	2115
一言	905	青影	945
岡	1075	青葉	2175
岩崎	19	青波	27
山口	875	青影	875
平中	155	青葉	545

青学-42775 名古屋大-6925
差26475にて青学の勝

〔評〕
昨年の関西遠征の折、最初土を上げられた相手、返り討ちを食たさぬものと意気すまじくぶつづたが丁度試合前の予備走で足踏われおぼろしく強引な走り、足踏がばたいた調子、殆んど開始不可成かと思わせたが部員一問手分けしてゴールの水をまいたり苦心の末、どうやらことなきを得た。
試乗の際、青葉の反抗、硬直状態が長く続いたので緊張を食わせたが案の定前段は多少騒がれ、青波も決して調子はよい方ではなかつた。
休憩中、それも二十二日に関東女子リレー戦があつたのでその間女子の強化練習中。男子の練習不足は明らかであつた。
一言、山口の乗つた青影はついに一人四回宛計四人十六回中、ロケット障礙を一回も恐ろせず途中失権。食つたものは一応一人もなかつたが自馬である故満点が一人も出なかつたという点、あまり気持のよい試合とは云えない。

〔副〕

対成蹊大学完結戦
三月二十五日(金)
於成蹊大馬場 晴 馬場 良

青学		成蹊	
選手名	減点	選手名	減点
一言	1575	瀬川	0
高倉	225	山田	159
岡	199	池田	139
細内	159	清水(美)	199
平中	255	清水(道)	191
岩崎	175	相川	255

青学-102475 成蹊-947
差7275にて成蹊の勝

〔評〕
成蹊の不手際からかこの試合は昨年度分の定期戦。当日は晴天に恵まれ雲一つない青空である。試合試合と追いまくられた三頭馬も延々三時間わたる馬輪送のため、いやが上にも疲労度は極点に達しているかと思われた。
他の大学の馬ならとうにバテて動けなくなるところだがそこはきたえた馬ゆえに何らおおくびにも出さない。前段の青波に普段快調を持つてなる高倉が、以外にも乗りこなせず第三障礙で二過失失権。晴天にわかにかきくもつた感があつた。一言満点馬を乗りきれず、自分も又桃腹に推進力不足で平中主将又桃腹に何らほどこそ処置なく反抗タイム失権。僅かに自馬に乗つた岩崎副将、細内の後段組が食つて完敗をまぬがれた程度。島海、倉田なきあとの成蹊もメンバーが落ちたとはいへなかなかに予断を許す相手ではなかつた。
疲れた馬を両校で日本馬のバスに乗せ、帰国出来たのが何よりの幸であつた。

〔副〕

第八回東都四大学リーグ戦
本学二連覇

快調にめくられた四月十九日第九回東都四大学リーグ戦が、馬事公苑で行なわれた。連覇を目指す本学は、フアイト満々試合にのぞんだ。

第一試合、本学対日本大学
一番日大島崎君（乗馬豊姫号）は、快調に全障礙を無過失で飛越、二番本学細内君はラッキーセカンドでややあふなかつたが、よく乗りこなし満点でゴール。
三番日大主将森本君は、農工大の新馬ツトミ号に騎乗全く不安定な飛越ぶりであり第一・二を飛ばしたが、第三、四障礙を飛越できず二拒否失権で減点4。四番本学岡君は、常習号で、第三障礙まで、順調に通過、第四で一拒否されたが、通過第六のレンガ障礙を二拒否されたが、よく立ち直り第十障礙迄、難なく通過、第十一を一拒否後、飛越、然しここでタイム失権し、減点6。五番日大矢野君（昭南号）は推進のよくきつた騎乗で第十一障礙迄快調に飛越、最後の三段で二拒否一反抗されたが減点4は、立派。六番本学岩崎君は、スタート

した途端勝姫号に頭をあげられ第一を一拒否第二障礙も一拒否、一反抗され危なかつたが、再行で、通過第三、四も飛越したが、第五で二拒否されて、失権、減点204に終った。
ここから後段に移り七番日大小林君は快調に、全障礙を飛越したが途中経路を、間違えて他の障礙に向けた

日大 本学
-588 対 -472

減点	日大	馬名	本学	減点
0	島崎	豊姫	高倉	0
214	森本	ツトミ	平中	200
14	矢野	昭南	堤	0
4	小林	ラッキーセカンド	細内	0
198	長谷川	常習	岡	68
158	武居	勝姫	岩崎	204

のを反抗に取られ減点4。八番本学高倉君（豊姫号）前投が満点なので、慎重に飛越して、無過失でゴール。
九番日大長谷川君は、全く推進力なく、常習号で、第五で失権し減点19は、日大の致命傷となつた。十番本学主将平中君（ラッキーセカンド）第一障礙二拒否後逃避・拒否・反抗等あつたが第四まで飛越、第五のドラムで二拒否されて失権し減点20、十一番日大武居君、小柄だが、なかなかのフアイトの持ち主、勝姫号を、第五迄よく手の中に入れて飛越したが、第六の門扉第七のレンガで、各々二拒否されて、失権したが、減点158で、46点の食い。十二番本学のユース堤君、片眼のハンデをよく克服して実に味事な騎乗。昭南号で、堂々満点でゴール。こうして、本学は第一戦に、快勝し、連覇へのスタートを切つた。

ず、その上四反抗を取られ減点272、四反抗は、一考を要すところ。六番農大齊藤君は後習号で大奮闘、何せ左へ曲らないんだからひどい。故々反抗され、第六障礙で、タイム失権、減点220、七番本学高倉君は先ほどと同じ豊姫号に騎乗、前よりも快調に飛越して、満点でゴール。八番上妻君は、ラッキーセカンド号で一落の減点3、九番本学平中君（ツトミ号）前よりも、一

第二戦 対東京農業大学
一番本学細内君は、第一戦と同じ、ラッキー・セカンド号に騎乗、惜しくも一落下して減点3、二番の農大吉田君（豊姫号）は、最障礙を一拒否されて減点4、三番、本学岩崎君は苦手となる核殻号で奮闘するも、一つも、飛越できず減点254。四番農大松村君はツトミ号に好騎乗、第十障礙まで一反抗のみで、味事に飛越然し、第十一・二障礙を各々二拒否されて失権し減点66。五番、本学岡君は勝姫号で、一つも飛越でき

本学 農大
-696 対 -703

減点	本学	馬名	農大	減点
3	細内	ラッキーセカンド	上妻	3
0	高倉	豊姫	吉田	1
272	岡	核殻	森本	220
74	平中	ツトミ	松村	66
93	農	核	齊藤	220
254	岩崎	核	上杉	190

部員の手で強くなることは疑いなく。小柄であるがかなり飛越能力はあると見てよい。
 青光号(重半血七才駒鹿毛、体高一六〇cm、胸面一八三cm、管四十九、五〇、北海道産、特級星珠目上、父呂原ベル種、母野風中半血)現在予つと平木コーチが調教しておられるが、最上馬上りの故か今のところ注意力が散漫で一五〇cm開閉に設置した横木にもつまずいたりしている。しかし一六〇cmの馬格で耐久力も序々につき出し、将来性は多分にあるとみて良い。どうやら我等が待ちに待った馬となりそうである。



協会便り

- 昭和三十五年度協会幹事長に中大四年の大矢晃弘君が決定した。
- 協会では前年度送算繰出のため行なってきたダンス・パーティーやカレンダーの売出しを廃止し代りに協会費を充来の二階円増しにした。
- 今年度協会の理事会による新委員決定に本学OB中島貞次氏(昭二九卒)が選出された。
- 毎年一回しか行わなかった関東学生馬術争覇戦は今年から春にオープン戦を行い、秋にトーナメント定期戦の二回となった。
- 協会では本年度五月以降のスケジニールを左記のごとく発表した。
- 五月十五日オリンピック選手壮行会
- 六月四日五日東京大会
- 六月九日十一月
- 六月十四日関東選手第一次予選
- 六月二十七日 第二次予選

部室あれこれ

○一昨年破傷風のため苦心の甲斐なく死亡した青卒の命日は十一月一日。部室の前の墓標には今でも時たま花がつけられている。心暖かきものよ。どうかずつと認めてね。

○初祭会にしろ、名古屋大学戦にしろとも青卒のグラウンドで試合をする。今年はいつも突風吹きすさび...である。一体どうしたつてんでしょね。

○春は三月以来ずつと府中、中山の中央競馬場で四人ずつ交代で男子は場内整理、女子は子供へのサーブのためボニーの荷をしていながらたまたまその日の売上げが多ると一金百万円の大金袋をくれる人が熱くて猫ばくをきめこんでいる人はいないでしょうね。

○T子さん、あなたか部室に現われなくなつてからさびしく思うものがあります。もう一度考え直して頂くわけにはまいりませんか。部のためにも学校のためにもそして日本馬生馬術界のためにも。

○いくら欲が多くても女子の試合には自ら箱番を買つてでる人はいない。部だが青卒女子は第六回関東女子リーグ戦に他校に充がけてこれを行つた。「これでこそ...」と思うのは数少くあるまいが微運に動いていたよかないね。

○去る四月九日の四大学戦で最優秀選手になつた提君、今回は青卒が当番校だけに賞品を買うのも幹事である彼の役目。どうせ自分でもらうのならもつとよいものを頼むんだつたとほやくまいことか。

○これも同じ提君。四大学戦、関学戦と日大の校歌にの彼はいつ、青藤号、岩崎修(前四)金も大食い相手を恐れさせている。子鳩男(前二) 山田芳通(後二)

も、解散時間も知らせず、その点に關しては、誰に聞いても「ノーマント」これを計画したが、たまたま又さん、Yさんみたいな(失礼)人達であり、馬房の前から二列に並んで、行進するらしい等という噂を聞いた為もあるが、一体どんな所に連れていかれるのか、いさゝか心配だった。「寮の人に、どこへ行くのか、何時頃帰るのかと聞かれても、知らない、わからない、で困ったワ」とは、歓迎される側の一年生女子の話。結局、神宮内苑で行うことになつて、五十名近い部員は、大きな木の下、芝生の上に腰を下して、去年歓迎会をして貰えなかつた私達二年生のひがみではないが、楽しい、なごやかな一ときを過した。

緑鞆会総会行わる
恒例の緑鞆会総会は五月二十三

日(月)午後六時より青学校友会館二階のロビーで〇日二十数名をもつて行われた。青木会長挨拶のあと会計の内藤氏より前年度分緑鞆会費の決算及び今年度予算案が提出され審議の後、認められ、事業計画及び監督選出の件が出たが、現役〇日の意見に差があり、緑鞆会幹事一任という事で決意には至らなかった。なお役員改選も次いで行われたが青木会長以下前任内藤長一幹事に代り米谷清志氏小池信夫氏の両氏が新幹事となつた。

- スケジニール
- 五月二十五日、六月一日 男子関西選征
 - (関学、神戸大、甲南大、名古屋大、名古屋市立大、愛知大、三重大)
 - 六月四日、五日東京大会於パレス
 - 六月七日、八日 関東大学対筑オリーブ戦
 - 六月十四日 関東選手選抜第一次 於馬事公苑
 - 六月二十七日 関東選手選抜第二次 於パレス
 - 七月一、二日 東都九大学リーグ戦 於馬事公苑
 - 七月中旬 夏期合宿予定
 - 七月中、四大学新人戦及び成績定期戦

編(集)後(記)

最初の計画はどこえやら、とうとう雑誌が六月に延びてしまつた。でも考えてみると季節的にも馬術部というものの行事にしてみればこれでいゝのかも知れない。今回は原稿も新入生を迎えて大分豊富になり御投稿の諸君には大変感謝している。よりやく六月、十二月の年二回発行と定期的になつてきたし軌道に乗るものと思う。新馬も入りして又夏すぎ、馬匹改良も行われるであらう。先望の御寄稿が沢山になることを祈つて。...

「いななき」二号(非売品)
昭和三十五年六月七日発行
発行所 東京都渋谷区緑岡二二
青山学院大学馬術部
代表者 平 中三彦
編集責任者 岡 良介
印刷所 東京都豊島区池袋一ノ五二五
共栄タタ 社
電話 〇九二一七